

皮膚科で美人女医さんにおちんちんに軟膏を塗ってもらった体験談

もう10年くらい前の話。

駅のホームで、ふと目に留まった看板。

「○○皮膚科クリニック 新規開院」

その下に掲げられた女医の写真が、あまりに綺麗だった。

広告写真特有の作り笑顔ではなく、どこか本物の温かみを感じさせる顔立ちだった。

清楚系で、美人なんだけどどこか親しみがあり、同じサークルにいたら絶対に好きになっちゃうような子。

その頃、俺の股間はずっと痒かった。最初は軽い刺激程度だったのが、日に日に気になり始め、夜中に目が覚めるほどだった。かきむしりたくなる衝動を抑えきれず、我慢するのも限界に近づいていた。そんなタイミングで、あの看板を目にしたのだ。

この女医さんにおちんちんを見てもらいたいという性的欲求があるのは否定しないが、事実俺のちんぽは痒い。

この皮膚科に行くのは正当な理由があるのだ。

「……行ってみるか」

そう思った瞬間、手が勝手に動いていた。スマートフォンで予約を入れ、翌日の午後の枠を確保した。

診察の日、クリニックは駅から徒歩数分の小さなビルの1階にあった。若い女性の受付が丁寧に対応してくれ、問診票を渡された。患部の症状を書く欄に正直に「陰茎のかゆみ」と記入した。

名前を呼ばれるまで10分ほど。待合室の椅子に座っている間、心臓の鼓動が徐々に早くなっていく。看板で見た女医が本当に担当してくれるのか。それとも別の医師なのか。期待と不安が入り混じっていた。

「○○さん、どうぞ」

白いカーテンの向こうから呼ばれ、診察室に入った。

中にいたのは、看板の写真よりもさらに綺麗な女性だった。写真では捉えきれなかった肌

の質感、睫毛の長さ、そして落ち着いた声の響き。白衣の下に淡いピンクのブラウスを着て、髪を軽くまとめている。年齢は30代前半くらいだろうか。清潔感のある美しさだった。

「こんにちは。本日はどうされましたか？」

落ち着いた声に、余計に胸が高鳴った。

「あ、あの……陰茎が、痒くて……」

言いながら顔が熱くなるのを感じた。女医は表情をほとんど変えず、静かに頷いた。

「わかりました。では、見させていただきませうね。服を下ろして、患部を見せてください」